広島女学院大学論集　第55集
Bulletin of Hiroshima Jogakuin University ***55***: 39－54, Dec. 2005

D. H. ロレンス：“Blessed Are the Powerful” に見られるエミリー・ブロンテの「生」への評価

山内　理恵

（2005年10月11日　受理）

D. H. Lawrence's Evaluation of the Life of Emily Brontë in “Blessed Are the Powerful”

Rie YAMANOUCHI

Abstract

The purpose of this paper is to observe how D. H. Lawrence evaluated Emily Brontë's “life” when he wrote ‘Emily Brontë had life,’ in his essay “Blessed Are the Powerful.” By analyzing the essay, this paper tries to clarify his complicated idea of “real life” and examine what he meant when he called her life “real.” Then the paper suggests the possibility of the two writers sharing very similar philosophies of “life,” by analyzing Brontë's poem “No Coward Soul Is Mine.” The poem shows her worshipping the power of creativity and her devotion to creative activities in life. Her ideas of and attitudes towards leading a creative life seem to have many elements in common with what Lawrence defined as “having the power of life”; with which support, according to his theory, we can have “real life.” At the same time, however, the ways he characterizes “the power of life” are different. Lawrence describes it as something changeable and transient, while Brontë presents it as stable and permanent.

エミリー・ブロンテ（Emily Brontë）と D. H. ロレンス（D. H. Lawrence）との関係を集中的に論じた論文は稀である。ロレンスの批評本のインデックスを見ても，エミリー・ブロンテが載っているものは少ない。マイケル・ブラック（Michael Black）の *Lawrence's England*（2001）やニコラス・マーシュ（Nicholas Marsh）の *D. H. Lawrence: The Novel*（2000）は，『虹』（*The Rainbow*）と『嵐が丘』（*Wuthering Heights*）との類似点を指摘しているが，それも数行触れるだけである。キャロル・シーゲル（Carol Siegel）の *Lawrence Among the Women* は，例外的にかなりのページをこの二人の作家の影響関係を論じるためにさいている。彼女は，ジョージ・エリオットやシャーロット・ブロンテからの影響とあわせて，今までの批評家以上に，ロレン

スがエミリー・ブロンテに影響を受けていることを強調している。

いずれにせよ，ロレンス研究にブロンテの存在がなかなか入り込まないのは，おそらくロレンスのブロンテに関する言及が少なく，目立たないからだと思われる。また，男女の性を大胆に扱うロレンスと，大人の性を表面化させないブロンテのイメージの違いも，手伝っているかもしれない。しかし，ロレンスは，数は少なくとも，執筆の中で実際にブロンテに言及しているのであり，彼女の存在や作品に反応しているのだから，それがなぜかを考えてみるのも意味があると思う。そこから，今まであまり焦点を当てられなかったロレンスのブロンテへの考えや評価の内容，両作家の思想上の共通点・相違点などが明らかになるだろうし，ロレンスがブロンテを読んだ時に体験した感情の動きが，多少なりとも推測できるだろうからだ。本論のスタート地点は，そのような考えからである。本稿では，ロレンスのエッセイ集 *Reflections on the Death of a Porcupine* に収録されている “Blessed Are the Powerful” から，直接ブロンテに言及している文章を取り上げる。そして，セクションⅠではこのエッセイの内容を分析することで，彼がブロンテをどのように解釈しているかを見る。セクションⅡでは，セクションⅠの内容を私達が知っているエミリー・ブロンテ像と突合せ，彼が具体的に彼女のどのような側面を評価していたかを考える。そして最後にセクションⅢでは，ブロンテ自身の中にもロレンスと共通する思想があるかどうかを調べるために，彼女の代表的な詩の一つである “No Coward Soul is Mine” の分析を行う。

Ⅰ

さて，“Blessed Are the Powerful” でのブロンテに関する言及は，以下の文である。

> Man lives to live, and for no other reason.　And life is not mere length of days.　Many people hang on, and hang on, into a corrupt old age, just because they have not lived, and therefore cannot let go . . . .　And again, life does not mean length of days.　Poor old Queen Victoria had length of days.　**But Emily Brontë had life.　She died of it.**　(*Reflections on the Death of a Porcupine*（以下 *RDP* と表記する）322：強調は山内)

ロレンスによれば，ヴィクトリア女王は長生きしたにもかかわらず本当の「生」を生きておらず，ブロンテこそ本当の「生」を全うして死んだという。なぜロレンスは，あえてエミリー・ブロンテの名をここで挙げたのだろう。マイケル・ハーバート（Michael Herbert）は，ヴィクトリア女王（1819年５月24日生まれ）とブロンテ（1818年７月30日生まれ）が同い年であり，

前者は81歳まで長生きし，後者は30歳までの短い人生だったことを脚注で述べるが，それだけの理由でブロンテの名が使われたのだろうか。他の人物の名でもよかったはずである。それに，少なくとも，ロレンスがブロンテの生き様に共感していなければ，当然彼女の名はここでは使われなかっただろう。ここで彼が，あえてエミリー・ブロンテを選んだことは，彼がブロンテの生き方を評価していたことを示している。

明らかに，ロレンスはブロンテの生き方に感銘を受けており，「真の生き方」として捉えている。しかし，ブロンテの生き方のどのような点を評価したかを知るには，彼にとって「真に生きる」とはどのような意味を持つのかを理解する必要がある。そこで，まずこのセクションでは，このエッセイの内容を租借し，彼にとって「真に生きる」ことが示す意味を具体的に見てみる。

彼は「生きる」ことについて，こう説明している。

> And to live, life must be in us.　It must come to us, the power of life, and we must not try to get a strangle-hold upon it.　From beyond comes to us the life, and the power to live, and we must wisely keep our hearts open.　(*RDP* 322)

つまり，「真に生きる」には，「生命の力」を体内に持つことが必要で，「生命の力」は人間の中にはじめから存在するものでも，人間が努力して作り上げるものでもない。それは彼方（beyond）からやって来るものであり，我々は心を開くことでそれを受け入れるのである。言い換えるならば，この「力」を人間は意識的にコントロール出来ず，この「力」にしがみつくこと（strangle-hold）もできない。「力」は人間の理解を超えた原理で，与えられたり与えられなかったりする。また，「心を開く」とは，以下の説明により，理性，金銭，道徳，社交術などの，人間の作り出したルールに縛られることなく，エゴや自惚れを捨て去り，無心な状態でいることと理解できる。

> However smart we be, however rich and clever or loving or charitable or spiritual or impeccable, it doesn't help us at all . . . . if we want power, we must put aside our own will, and our own conceit, and accept power, from the beyond.　(*RDP* 325)

現代では政治力や金の力，武力など，表層的な力が横行し，人々は強欲で嫉妬深いとロレンスは多くのエッセイで嘆いているが，ロレンスが求める真の「力」とは，これらの表層的な「力」とは相対立するものであり，尊敬し崇めるべきもの（something you've got to respect, even

revere: *RDP* 324）である。“revere” は，“reverend” や “reverence” からわかるように，宗教的な崇拝の意味合いが入る。現代人が忘れてしまったこの「崇拝すべき〈力〉」について語るとき，ロレンスは，現代人が文明や技術の発展に自己満足して自信過剰となり，人間を超える神的存在を軽視・無視するようになったことを仄めかしている。ここでの「神」とは「生命の力」のことであり，キリスト教の神ではない。また，彼は「力」を「意志」(will）や「知性」(intellect）とも区別している。「意志」も「知性」も人間が操ることが出来る道具である。“Blessed Are the Powerful” によれば，「力への意志」(power-to-will）は虐待行為（bullying）につながり，「知性」で物事を論じることは「心へ通ずる経路を塞いでしまう」（strangle the passages of the heart: *RDP* 322）ので，いずれも「心を開く」妨げになり，「生命の力」を手に入れることが出来ないという。「生命の力」は，全く人間の力を超越したものであり，同時に，受け入れる側に邪念など心の汚れがあると手に入らないものである。

この「生命の力」が具体的に何かというと，“Power is *pouvoir*: to be able to.　Might: the ability to make: to bring about that which may-be.” (*RDP* 324)，つまり，何かを作り出す，あるいは生じさせる力である。また，以下のようにも説明されている。“First, power is life rushing in to us.　Second, the exercise of power is the setting of life in motion”（*RDP* 323）.「力」は我々の中に入り込むと生命力となり，それを活用することによって「生」が動き出す。「生命の力」によって我々の「生」が活発化し，積極性を増すようである。しかし，次の引用からわかるように，この「生」は，すでに「生」を持っている人にしか与えられない。言い換えれば，「生」の原動力となる「力」も，すでに「真に生きている」人たちにのみ与えられるのである。

> But the life will not come *unless* we live.　That is the whole point.　“To him that hath shall be given.”　To him that hath life shall be given life: on condition, of course, that he lives.　(*RDP* 322)

つまり，「生命の力」に助けられない時も積極的・創造的な「真の生」を生きている人が，「生命の力」を天から授かってますます積極性・創造性を増すというのだ。ロレンスが軽蔑するような無気力や臆病な状態であっては，この「力」は授からない。

では，ロレンスが言う「真に生きる」とは，どういうことを言うのだろうか。彼は以下のように定義している。

> Living consists in doing what you really, vitally want to do: what the *life* in you wants to do, not what your ego imagines you want to do.　(*RDP* 323)

自分の意思ではなく，自分の生命自体が望んでいることというのは，言い換えれば，ロレンスが言うところの「血の意識」(blood-consciousness) が本能的に欲する生き方とも言えるだろう。ロレンスは，人間は「理性的自己」(mind-self) と「血の意識による自己」(blood-self) から成ると考える。後者は “the self that lives in my body” (“On Being a Man”: *RDP* 213) とも呼ばれ，以下のような説明がされている。

> It is the self which darkly inhabits our blood and bone, and for which the ithyphallus is but a symbol. This self which lives darkly in my blood and bone is my *alter ego*, my other self . . . . (*RDP* 216)

彼は，この「肉体的自己」の，謎めいて怪しげで，不可解で危険な盲目状態を，“On Being a Man” の中で，黒豹が潜むジャングルの闇にたとえている。「肉体的自己」とは，自分の体内に，知的に理解できず，奇妙な魅力と反発とを起こさせ，わけのわからない苦しみや，恐ろしい喜びをもたらしたりする奇妙な動物がいるようなものであるという (“On Being a Man”)。いわば，理性では説明がつかない本能的衝動のようなものだろう。まとめると，「心を開いている」ことに加えて，自分の生命，あるいは「肉体的自己」が本能的に欲している行動を，「生命の力」を授かる以前から積極的に行っていることが，「生命の力」を入手する条件となる。

もう少しロレンスの「生命の力」についての説明を加える。彼によると，この「力」は，人間と神の至上の特質 (Power is the supreme quality of God and man) であり，物事を生じさせたり (the power to cause)，創造したり (to create)，作ったり (to make)，行動したり (to do)，破壊したり (to destroy) することができる。つまり，状況に変化を起こさせる神憑り的な力と言える。この「力」は色々な形で現れる。サムソンのように肉体的力であったり，ソクラテスのように知的力であったり，ナポレオンのように武力であったり，ピットのように政治的力であったりする。しかし，世俗の表層的な「力」とは違い，人間の能力を超越している。そして，この「力」を生かす「条件」として，下の説明にあるように，勇気，鍛錬，内面的孤立が必要となる。

> And having admitted the power from the beyond into us, we must abide by it, and not traduce it. Courage, discipline, inward isolation, these are the conditions upon which power will abide in us. (*RDP* 325)

つまり，たとえ「力」を得ることが出来たとしても，それで「真の生」を手に入れたわけでは

ない。臆病者や怠け者，他人に依存するような人間は，この「力」を生かすことは出来ない。「勇気」とは，自己の危険や破滅の可能性にもかかわらず突き進んでいける素質である。よって，この力を生かせるのは，自己を甘やかさないで，自分を高めるために孤独な試練に耐えうる，ストイックな人物と言える。ロレンスが「生命の力」を活用した人物として挙げているのは，上に挙げた他には，モーゼ，モハメッド，イエス，ブッダ，ニュートン，エジソン，ピョートル大帝，シーザーなどがいる。彼らはいずれも，周囲から孤立しても情熱を持って試練を乗り越え生きた英雄達で，未知の世界から授かった「力」によって，新しいものを世界にもたらした。一方，表層的な力しか持っていなかった者の例としては，独裁者ではムッソリーニ，レーニン，プリモ・デ・リベラ，ロイド・ジョージなどが，ビジネス業界ではフォードが挙げられる。いずれも，ファシズム，社会主義，民主主義，自動車の大量生産化など，集団に基本を置く人物達である。“The Reality of Peace” でロレンスは集団主義を批判し，羊のように集団であることに力を見出し，虫のように安全性を求める生き方は「無」であり，生きた屍であり，エゴの塊で，おぞましいと言う。また，集団で力を発揮しようとする人物は，「臆病」であることを「博愛」や「人類愛」とすり替え，「強欲」と「嫉妬」から力を得ると言う。彼らに金を循環させる力はあっても，「生」を循環させる力はないというのである。“Blessed Are the Powerful” では，これらの独裁者達に，「無害な」(harmless) と「肥満の」(fat) という修飾語が，繰り返し使われる（強調は山内。）

> So they set up a little **harmless** Glory in baggy trousers —Papa Mussolini— or a bit of **fat**, self-loving but amiable elder-brother Glory in General de Rivera: and they call it power. (*RDP* 323)

> Shall we exclaim, in a **fat** voice: *Aha! Power! Glory! Force! The Man!* — and proceed to set up a **harmless** Mussolini, or a fat Rivera? (*RDP* 324)

> Except it's probably a good thing to have the press, —the newspaper press— crushed under the up-to-date rubber heel of a tyrannous but **harmless** dictator. (*RDP* 324)

「肥満」は不活発・怠惰のイメージを与える。表層的力が「無害」と「怠惰」とで言い表されるならば，「生命の力」を授かった「真の生」は活発で危険であると言い換えられる。また，ロレンスはこれらの表層的な力しか持たない独裁者を指して，“They never even roused real fear: no real passion. Whereas a manifestation of real power arouses passion, and always will”（*RDP* 328）とも言っている。つまり，「真の生」は，恐怖心を起こさせるほどに激しい情熱を伴うも

のなのである。人を無謀にさせる程の情熱が孕む危険への恐怖のことであろう。

さて，以上のことを考慮に入れると，エミリー・ブロンテが「本当の生を全うした」という短い文章は，ロレンスの彼女への考えを多く語る。彼の解釈では，ブロンテは「心を開いた状態」，つまり，理性，金銭，道徳，社交術などの，人間の作り出したルールに縛られることなく，エゴや自惚れを捨て去り，無心な状態でいた。更に，彼女は「力」を授かる以前から，本能的に肉体的自己が望んでいること（つまり，詩や小説を書くという欲望）を察知し，自力ですでに積極的にその作業に取り組んでいた。そして，「力」を天から授かったとき，彼女は勇気と鍛錬と内面的孤立とによって自分を活発に鍛えて磨き，この「力」を生かして，周囲に危機感を与えるほどに恐ろしい情熱で，そして人間離れした力で，周囲の状況を変えるような創造や破壊の行動を行った，ということになる。これらのロレンスが持ったエミリー・ブロンテへの印象は，私達が知っている彼女のイメージとかなり重なる。次のセクションでは，私達の知っているブロンテ像と，ロレンスがエッセイの中で称えた像との接点を見る。

Ⅱ

「心を開いた状態」が，ルールや欲，見栄に縛られない無心さと定義するならば，エミリー・ブロンテほど人間の作り出したルールや他人の目に無関心だった人物も稀である。実生活では，彼女は少女時代から自閉症的なほどに社交を無視し，自分が話したい相手（主に家族）としか交流を持たなかった。また，周囲の目や流行を気にすることなく，流行外れの古いドレスを身につけたり，スペイン風に髪を結ったり，ジプシー女のような服装をしたり，周囲が驚くような模様の布を買ったりして，自分の気が向くままのファッションを身にまとっていたそうである。『シャーロット・ブロンテの生涯』を書いたギャスケル夫人は，エミリーのことをこう語っている。「エミリーは他から何の影響も受けない。世間の意見と接することは無かった。何が正しく，何が適っているかに対するエミリー自身の決定が，彼女の行動，動作の法則となった。これに関して誰にも干渉させなかった」(168)。また，シャーロットの友人，エレン・ナッシーは，エミリーは「自分自身の法であり，その法を守るヒロインだった」（フランク：161）と述べている。このように，エミリー・ブロンテは多くの点で，流行や慣習などの表層的な社会のルールには全く無関心で，世俗離れしていたようである。

また，他人に評価されることを想定せずに，主として自分の楽しみだけのために作品を書いたという点でも，彼女は他人の目を気にすることなく無心であったと言えるだろう。『嵐が丘』は出版のために書かれたが，それでも彼女は匿名を希望しており，作品を通して自分が世の中に出たり人と交わりを持ったりすることは全く望んでいなかった。詩は出版を想定せず，自分

だけの世界として書き綴られた。一般の作家達や詩人達が，読者や批評家に高く評価されたいと願い，読者層などを意識しながら操作的に作品を書くのと対照的に，彼女の作品は見栄や飾りのない「無心」の産物であったと言える。表層的なルールへの無関心は作品の中にも表れている。道徳や教訓を小説の中に盛り込むことが当然とされていたヴィクトリア朝初期に，『嵐が丘』は道徳や教訓を超越している。須賀有加子氏が指摘するように，彼女は「おそらく全く意識せずに，ヴィクトリア朝の秩序と価値体系をくつがえしてしまった」(184) のである。そのため，倫理的観点から作品を解釈した同時代の批評家達からは酷評された。多くの批評は，文筆の勢いは認められながらも，「不快な作品」と否定的な評価を下している。具体的な例を挙げると，

> The success is not equal to the abilities of the writer; chiefly because the incidents are too coarse and disagreeable to be attractive, the very best being improbable, with a moral taint about them, and the villainy not leading to results sufficient to justify the elaborate pains taken in depicting it. (*Spectator*, 18 December 1847.　Allott: 39)

> ... the aspect of the Jane and Rochester animals in their native state, as Catherine and Heathfield [sic], is too odiously and abominably pagan to be palatable even to the most vitiated class of English reader. (Elizabeth Rigby [Lady Eastlake]: *Quarterly Review*, December 1848. Allott: 47)

などがある。両記事とも，当時の道徳的社会通念をベースに批評していることがわかる。『スペクテーター』の記事では，当時慣例だった勧善懲悪のパターンが作品の中に見出せないことを不満とし，後者は主人公達の非キリスト教的要素に嫌悪感を示している。後に F. R. リーヴィス（F. R. Leavis）が，『偉大なる伝統』(*The Great Tradition*: 1948) の中で，『嵐が丘』をイギリス文学史上の「突然変異」と呼んだことは有名である。スコットやバイロンなどの先輩作家から大きな影響を受けながらも，彼女は既存の形式にも当時の価値観にも囚われることなく，独自の作品を作り上げたのである。

ところで，『嵐が丘』の詩的美が認められ，ようやく作品の評価が上がるのは，1870年代あたりからである。「芸術のための芸術」という考え方が受け入れられた世紀末への流れが，倫理観に惑わされずに作品の芸術性を評価できる土壌を作ったのだろう。1873年の『ギャラクシー』(*Galaxy*) は『嵐が丘』を，“every page of that work bears the stamp of true genius” (Allott: 81) と評価しており，1877年にはリード（T. Wemyss Reid）が，“that book is alone sufficient to prove that a rare and splendid genius was lost to the world when Emily Brontë died”

(Allott: 84）と，やはり同じようにブロンテの天才振りを絶賛している。1883年には，ボードレールの『悪の華』を英訳したスィンバーン（A. C. Swinburne）が，『嵐が丘』の残忍さについて以下のように述べ，作品を擁護している。

> The pervading atmosphere of the book is so high and healthy that the effect even of those ‘vivid and fearful scenes’ which impaired the rest of Charlotte Brontë is almost at once neutralized —we may hardly say softened, but sweetened, dispersed and transfigured— by the general impression of noble purity and passionate straight-forwardness. (Allott: 90)

スィンバーンの，純粋さや一途な情熱への賞賛は，人間の「生」への取り組み方に重きを置くロレンスの価値基準の置き方と共通する部分がある。その後も，時代が進み，批評の重心が，社会への適合性を評価基準としたヴィクトリア朝の合理主義から離れ，個人の混沌とした心理を内包する人間存在への理解に移行するにしたがって，『嵐が丘』とエミリー・ブロンテの評価は上がっていく。ロレンスが生まれたのは1885年であり，ちょうど『嵐が丘』の再評価が活発に行われ始めた時期である。彼がエミリー・ブロンテの生き方に感銘を受けたのには，ロレンスが独自に発展させた思想と関係があることはもちろんであるが，彼が生まれ育った時代の思想的な流れとも関係があったと思われる。

エミリー・ブロンテは，30年と数ヶ月という短い生涯を通して，約193編の詩と『嵐が丘』とを書いている。想像・創作の世界に支えられ，慰められた彼女の生は，まさに創作への欲望をエネルギー源として生きた人生だったと言える。ロレンスが言うところの「肉体的自己」の欲する活動が，（ロレンス自身にとってと同じように）彼女にとっての創作活動だったのである。子供時代からひたすらコツコツと創作しつづけることで腕を磨き，しかし誰に評価を求めるわけでもなく，本論の流れで言えば，「生命の力」を授かる以前から積極的に且つ無心に活動していた。また「力」を授かって才能を開花させてからも，自分の才能に奢ることなく，社会に迎合することもなく，むしろ周囲からはかなり距離を置き孤立した状態で，独自の創作活動に励んできた。『嵐が丘』を見てもわかるように，嫉妬，虐待，恋愛，憎しみ，復讐などの情熱的な生の描写は，激しく攻撃的に読者の常識に挑みかかる。しかも，当時の小説が慣例としたような，勧善懲悪では終わらない。『ゴンダル』にしても，同じように倫理や道徳の枠組みを超越している。こうして彼女は，社会に困惑や反発を引き起こしながら，古いものを打ち壊して新しいものを作り出す過激な創造力を発揮し，当時の社会から（そして，姉シャーロットからまで）危険視されたのである。本人はそんなに意識していなかったかもしれないが，勇気ある創作活動だったと呼べるだろう。この世に新しい息吹をもたらし，大きな影響を与えたと言

う点で，ロレンスは彼女を，ナポレオンと同じように「真の生」を生きた人物として捉えたのである。

以上，このセクションでは，ブロンテのどの側面がロレンスから評価を受けたかということについて，私達が知っているブロンテ像と照らし合わせて，より具体的に考えてみた。最後のセクションでは，エミリー・ブロンテ自身にも，ロレンスが言う「生命の力」や「真の生」などと共通する思想があったかどうかを，彼女の代表的な詩 “No Coward Soul is Mine” を分析することで考えてみたい。もしそうであれば，二人の思想的な類似性を具体的に示すことができる。

Ⅲ

“No Coward Soul Is Mine”（1846年 1 月 2 日）は，『嵐が丘』（1846年執筆，1847年 8 月出版）と同じ時期に書かれた彼女の代表的な詩であり，彼女の創作への考え方をよく表現している。また，この詩は，聖書や賛美歌に使われるような言葉，表現，イメージを使っており，彼女が「創作の神」をキリスト教の神のように唯一神として捉えていること，そして，この詩が彼女から「創作の神」への敬虔な賛美歌となっていることがわかる。「創作の神」とは，本稿では，ブロンテに力を与えて創作活動を可能としてくれる「力」であり，“No Coward Soul Is Mine” の中で彼女が崇拝した詩神であると理解していただきたい。これは，ブロンテ自身の言葉ではなく，著者の表現である。

さて，彼女にとっての「創作の神」は，ロレンスが言う「生命の力」の一種であると言える。ロレンスは，一般論として客観的に，「情熱的に何かに取り組んで，その結果，世の中を大きく変えるような新しい状況やものを作り出す人たちの神憑り的な力」について論じようとしたため，「生命の力」という広い定義の言葉を使った。しかし，エミリーはそのような一般論には関心が無く，自分と「創作の神」との関係においてのみ，この「力」について考えた。そのため，詩の中で論じられる内容は，彼女にとっての「生命の力」である「創作の神」についてのみ語られており，他の種類の「力」については全く触れられていない。よって，以下の彼女の詩で称えられる「創作の神」は，ロレンスにとっての「生命の力」の範疇に含まれるものと理解できる。

第一，二連では，エミリーは内なる神（“God within my breast”）を持ち，この神への信仰によって彼女は強くなり，この世の嵐を怖がるような「臆病な心」を持たない，とある。

No coward soul is mine

No trembler in the world's storm-troubled sphere:
I see Heaven's glories shine,
And faith shines equal, arming me from fear.

O God within my breast
Almighty, ever-present Deity!
Life-that in me has rest,
As I —undying Life— have power in thee!

ここで語られる神は，彼女の胸のうちに存在するのだから，キリスト教の神ではない。むしろ彼女だけの詩神といえる。“Almighty, ever-present Deity” からわかるように，人間存在を超越した「神聖な力」であり，ロレンスが言うところの「天から授かる生命の力」と似ている。この神は彼女を恐怖から守り，この世の嵐に怖がらずに入っていく事を可能にしてくれる。しかし，言い換えれば，彼女は神の力を授かってからも試練（＝この世の嵐）を乗り越えなければならず，信仰で身を固めてこの試練と戦っていかなければならない。ロレンスは「生命の力」を生かすために人間は勇気，鍛錬，内的孤立が必要であるとしたが，エミリーの神も同様に，試練と向き合いそれを乗り越える勇気，試練に耐え抜くという鍛錬，そして一人で試練をくぐり抜けていく過程で求められる内的孤立を要求している。第二連で，詩人の不滅の生命が神の力と結びつくとき，生命は詩人の中に安らぎを見出すとある。ロレンスは「力」が我々の中に入り込むことで「生」が活発化すると論じているので，一見逆のことを言っているかのように思える。しかし，「創作の神」の力を得て詩人が安らぐのは，創作活動の不毛状態がもたらす苦悩から脱出して，創作活動が円滑に進み始めることに安堵感を覚えるからであり，活動を休止することを意味しない。よってロレンスの論と矛盾しない。ただ，エミリーの「不滅の私の生命」（“I—undying Life”「私」イコール「不滅の生命」）という言葉に関しては，エミリーが自分自身の生命に不滅性を属させているのに対して，ロレンスは，「人間」よりも「力」のほうに永遠性を置き，人間はその「力」をどこからか得て活躍するが，いずれその「力」を失うものと捉えている。彼は，“The Crown” では，シーザーとサウルのような英雄的な独裁者を指して，“And they fall inevitably”（268）と述べ，人間に授けられる「力」の一過性を仄めかしている。更にシーザーとナポレオンを例に挙げて，“The moment power triumphs, it becomes spurious with sheer egoism”（*RDP* 270）と述べている。他にもイエス・キリストや P. B. シェリーも「勝ち誇って，破滅した」例として挙げており，人間が「力」を保持することの難しさを繰り返し述べている。また，彼はよく人生を，未知の始まりと未知の終わりの間で燃える蝋燭の炎に喩

えるが，炎はいずれ燃え尽きる。炎のように儚く短い人生を，自己実現を目指していかに情熱的に生き，充実させるかが，彼にとっての大きな関心事である。ただ，彼が人間の永遠性を完全に否定したわけではなく，彼によれば，肉体と精神，光と闇，創造への情熱と破壊への情熱などの，あらゆる二項対立が完璧なるバランスによって消えた時，人間は時間を超越して永遠性に到達するという。しかし，このことは理論上は可能性があるが，現実に到達出来るのはかなり稀なようである。ブロンテの “undying Life” を，詩人達が共有する創作生命の象徴と理解することもできる。“Life” が大文字で始まっていることも，ここで言及されている「生」が，個人よりも大きなレベルの，絶対的な存在である「生」を指し示すためのように思える。しかし，いずれにせよ，自分と不滅の生命とを結びつけるブロンテに比べて，ロレンスは「生命の力」を一時的に人間に授けられる力として描いており，ブロンテの「生」が持つ不動・不滅のイメージはない。

第三，四連は，宗教の信条に虚しさを見出し，同時に「創作の神」の絶対性を疑うことの愚かさを歌っている。

Vain are the thousand creeds
That move men’s hearts: unutterably vain;
Worthless as withered weeds,
Or idlest froth amid the boundless main,

To waken doubt in one
Holding so fast by thine infinity;
So surely anchored on
The steadfast rock of immortality.

ブロンテは第三連で，信条を無意味だと拒否し，キリスト教という体制派が作り出す倫理・道徳的ルールよりも，「創作の神」の力のほうに真の永遠性を見出している。1841年 3 月 1 日に書かれた “The Old Stoic” の中でも，同じような傾向が見られる。その詩の中では，以下のように，彼女は財産，恋愛，名声への欲望をすべてつまらないものと否定している。

Riches I hold in light esteem;
And Love I laugh to scorn;
And lust of fame was but a dream

That vanished with the morn:

これらの欲望は，ロレンスが「エゴ」「見栄」「強欲」と表現するたぐいの世俗的な欲望と置き換えられる。このように，ロレンスが軽蔑した表層的な社会のルールや，エゴ，見栄，強欲を，ブロンテ自身も否定しており，二人共通して，世俗を超越する力，情熱，魂などの存在を信じて，それを追い求めている。ただ，ブロンテの「創作の神」の力への言及には，「岩のように不動，不滅である」（第四連）という重みを感じさせる表現が使われている。これは，「創作の神」の力を疑うことの無価値さを，枯れた雑草や大海原の泡（第三連）に喩えたこととの対比となっており，世俗のことにしか目が向かずに「創作」の力を馬鹿にする人たちの愚かさを表現しているのだが，ロレンスが「生命の力」を表現するときに使うイメージとは対照的である。彼は，この特別な「力」をエッセイ中で “It comes as electricity comes, out of nowhere into somewhere”（*RDP* 322）“It is like electricity”（*RDP* 326）などと，「電流」のイメージで表現している。どこから来たのかもどこへ行くのかも定かでなく，流れる（動き回る）ものである「電流」は，一過性の印象を与える。ここでもやはり，ブロンテの「創作の神」の永遠性と，ロレンスの「生命の力」の一過性との違いがある。

次に第五連では，「創作の神」が成せる業を説明している。

With wide-embracing love
Thy spirit animates eternal years,
Pervades and broods above,
Changes, sustains, dissolves, creates, and rears.

「創作の神」は，永遠の年月に生命を与え，天に偏在してたれこめ，変化させ，支え，溶かし，創造し，養う。一方，ロレンスは「生命の力」を，物事を生じさせたり，創造したり，作ったり，行動したり，破壊したりできると定義した。表現こそ違うが，両者は同じようなことを言っているようである。つまり，ある状況に積極的に働きかけ，主にその状況を変化させていく力のことを言っている。ブロンテの「溶かし」はロレンスの「破壊し」と結びつく。ただ，ブロンテの中の「支え」と同等の表現はロレンスのほうにはない。ロレンスにとって「生命の力」は状況を新しく変えていく力であるので，ある状態を「支える」という発想はなかったようだ。再びブロンテのほうに「持続」，すなわち不動のイメージが存在し，ロレンスのほうは絶え間なく「変化」する活動的なイメージが存在する。

最後に，六，七連では，キャサリンのヒースクリフへの愛のごとく，詩人の「創作の神」へ

の絶大なる信頼と崇拝の念とを表現している。

Though earth and man were gone,
And suns and universes ceased to be,
And Thou were left alone,
Every existence would exist in Thee.

There is not room for Death,
Nor atom that his might could render void:
Thou—THOU art Being and Breath,
And what THOU art may never be destroyed.

彼女によれば，「創作の神」は，生も死も人間存在も，そして宇宙をも超越した存在である。宇宙が絶滅しても存在しつづけることが出来，この神が存在しつづける限り万物は存在し続けるという。地球，人間，太陽，宇宙の儚さと，「創作の神」の不動・不滅の存在とが対比されている。この力を受け入れることで，「死」の存在が無くなり，「その力が無となる原子もない」ほど，この力は絶大である。そして，この絶大な「力」によって，詩人の魂は恐れるものが無くなり，不敵となる。ロレンスは「生命の力」を「神と人間の至上の要素」と呼んだが，ブロンテが表現する「創作の神」も，「至上の要素」と言ってよいほど現世を超越している。しかし，やはりイメージに違いがある。ブロンテはこの「創作の神」を「実在」(Being）であり「息吹」(Breath）であると表現する。両単語の頭文字が大文字になっているのは，これらが人間のではなく，絶対的存在である「神」の「実在」であり「息吹」であるからだろう。「息吹」は，ロレンスの「電流」のように，一時的なものであると見ることも出来る。しかし，“Thee” “Thou” “art” などの言葉使いは，キリスト教の聖書や賛美歌を思わせる。そして，キリスト教での “Breath” とは，創世記で神が人間に吹き込んだ生命の息吹である。そうならば，その息吹が現代まで脈々と引き継がれつづけているわけだから，この息吹を「一過性」と捉えることはできない。むしろ，やはり不滅性や永遠性と結びつくだろう。一方，ロレンスの「力」に関する以下の引用は，「力」を変化と結び付けている。

> Power puts something new into the world.　It may be Edison’s gramophone, or Newton’s Law or Caesar’s Rome or Jesus’ Christianity, or even Attila’s charred and emptied spaces.　Something new displaces something old, and sometimes room has to be cleared beforehand.

> Then power is obvious. Power is much more obvious in its destructive than in its constructive activity. A tree falls with a crash. It grew without a sound. Yet true destructive power is power just the same as constructive. (*RDP* 328)

ロレンスの「力」は目まぐるしく状況を変えていく。次々に古いものを破壊し，新しいものを創造しているようである。ブロンテに見られる，ゆったりとした不動のイメージは見られない。

結　　び

ロレンスの “Blessed Are the Powerful” の中での，ブロンテの生き方への賞賛は，彼が評価するような生き方をブロンテが実行していたと彼が理解していたことを示している。そして，その共感は，上の分析の結果，ロレンスとエミリー・ブロンテとの人生観の類似性から生じていることがわかった。ロレンスが “Blessed Are the Powerful” の中で「生命の力」と呼ぶものは，“No Coward Soul Is Mine” の中でのブロンテにとっての「創作の神」的存在に似ている。両者とも，社会の表層的なルールや慣習，人間のエゴや嫉妬，強欲などを蔑み，そのような世俗的なことに心を囚われずに，本能に従って純粋に情熱的に天職（肉体的自己が望んでいる活動）に励むことで，人間を超越する神的存在から力を得て，偉大な力を発揮できると信じた。この「神的存在」とは，どちらにとっても，キリスト教の神ではない。むしろ，本能的にやりたい行動を実行することを助け，自分の生をより豊かにしてくれる存在である。この神的存在の力を借りて，人間は創造し，破壊し，状況を新しく変えていくことが出来る。しかし，この力は，授かった人物がそれを使いこなすために，勇気を持ち，周囲から孤立して情熱的に，且つストイックに，努力を続けることが必要である。ロレンスがエッセイの中でブロンテの生き方を称えたのは，このように二人の人生観においてかなりの接点があり，ブロンテの生き方が彼の理想とする生き方に近かったためであろう。しかし，「神的存在」に対する二人の定義にはズレがあり，ブロンテがそれを不動で恒久的な，どっしりとした岩のような存在と捉えているのにたいして，ロレンスはそれを，人間が手に入れることも保持することも難しい移ろいやすいものと捉えている。使われる言葉やイメージから判断して，ブロンテの「神的存在」の不動・不滅の唯一神的なイメージは，キリスト教の聖書や賛美歌の中に描かれる神のイメージにより近い。自分と，自分の生命源である「創作活動」を可能にする神的存在との関係だけに焦点を当てて思考した結果，彼女の中では絶対的な唯一神と自分との，一対一の関係が浮かび上がったのだろう。一方ロレンスは，色々な場面や状況で人々の生を様々なかたちで豊かにするこの不思議な「力」を総体的に説明しようとしたために，「力」が人間に授けられる時の多様性や一

過性について言及することになる。ブロンテの，主観的に感じたことをそのまま書き連ねたようなアプローチに比べて，ロレンスは，人間を超越した「力」の「至上の要素」に宗教的な敬意の念を払いながらも，かなり客観的で分析的である。

参　考　文　献

英語文献：
Allott, Miriam, ed.　*Emily Brontë: Wuthering Heights*.　London: MacMillan, 1992.
Barker, Juliet.　*The Brontës*.　London, Phoenix Press, 1994.
Black, Michael.　*Lawrence's England: The Major Fiction, 1913–20*.　Basingstoke: Palgrave, 2001.
Brontë, Emily.　*The Complete Poems*.　London: Penguin, 1992.
_____.　*Wuthering Heights*.　London: Penguin, 1995.
Lawrence, D. H.　*Reflections on the Death of a Porcupine*.　Michael Herbert ed.　Cambridge: Cambridge UP, 1988.
_____.　*Study of Thomas Hardy*.　Bruce Steele ed.　Cambridge: Cambridge UP, 1985.
McDonald, Edward D, ed.　*Phoenix: The Posthumous papers of D.H. Lawrence*.　London: William Heinemann, 1961.
Marsh, Nicholas.　*D. H. Lawrence: The Novels*.　London: MacMillan, 2000.
Siegel, Carol.　*Lawrence Among the Women*.　Charlottesville: University Press of Virginia, 1991.

日本語文献：
ギャスケル，エリザベス　『シャーロット・ブロンテの生涯』和知誠之助訳　京都：山口書店，1980.
グナッシア，ジル・ディックス　中岡洋・芦澤久江共訳『エミリ・ブロンテ　神への叛逆』 東京：彩流社，2003.
坂本完春編　『英文学を学ぶ人のために』 京都：世界思想社，1987.
中岡洋編著　『「嵐が丘」を読む』 東京：開文社，2003.
中岡洋編著　『ブロンテ姉妹の留学時代』 東京：開文社，1990.
藤木直子　『エミリ・ブロンテ全詩集』 大阪：大阪教育図書，1995.
フランク，キャサリン　『エミリー・ブロンテ』 植松みどり訳　東京：河出書房，1995.